

アルザスとエルザス

——ナシオンとフォルクのはざま——

渡 辺 和 行

はじめに

一 仏独による編入

1 フランスによる編入

2 普仏戦争の衝撃

3 ドイツによる編入

二 国民性の定義

1 ミシュレとフュステルの定義

2 ルナンとラヴィスの定義

3 国籍と国民性

三 三色旗と鉤十字による同質化

1 マリアンヌによる同質化

2 戦間期の自治運動

3 ナチスによる同質化

四 コンセンサスの創出

1 懲罰から和解へ

2 新たなコンセンサス

むすび

はじめに

ドイツ人が「遅れてきた国民」とすれば、ある意味でフランス人は「せかされた国民」ないし「急ぎすぎた国民」であろう。「遅れてきた国民」とは一九三五年にヘルムート・プレスナーが著した書物の題である。ナチズムの権力掌握に触発されたプレスナーは、この本のなかで英仏と異なる道を歩んだドイツの近代化を考察して、国民形成と民主化にタイムラグを持ったドイツ近代化の「特殊な道」の精神史を明らかにした。ドイツには「倫理的なヒューマニズムによって正当化された国家思想が欠けていた」とか、「ドイツはいまだに国民国家への途上にある唯一の国である」とか、「ドイツは国民的統合が遅れ、啓蒙主義とも内的なつながりをもたなかった⁽¹⁾」という主張に、それを窺うことができる。

これに対してフランスは、民主主義をめざす啓蒙思想のあとおしを受けて国民国家の形成が進んだ国の例とされ、ナシオンの形成とデモクラシー理念の間に乖離はないと言われる⁽²⁾。ドイツの近代化と比較するとそういう指摘も可能であろうが、フランスは何の問題もなく「離陸」に成功したのであるか。アドルノ的に言えば、理性の自己崩壊と神話への回帰という『啓蒙の弁証法』は、フランスにはあてはまらなかったものであろうか。ドイツは、フランスの「光(Lumières)」の「照り返し(Aufklärung)」にすぎなかったものであろうか。ゲーテは『ファウスト』のなかで、メフィストフェレスに「あいつら(人間たち……筆者)はその照り返しを理性と呼んで、どんなけだものよりも、もつとけだものらしく振舞うためにその理性を利用しているんです」と言わせて啓蒙思想を揶揄しているが⁽³⁾、啓蒙の光が放つ獣性、すなわち近代化の闇の部分ゲーテが認識していたとすれば、彼の慧眼は賞賛に値する。

たしかに、フランス革命によって国民国家(Nation State)と国民(Nation)が創り出され、デモクラシーが軌道に乗った。しかしそのフランス革命でも、フランソワ・フュレのように、ジャコバン独裁期を「せかされた国民」が先を急ぎすぎた結果生じた「スリップ現象(dérapiage)」として捉える見解も存在するのである。しかも、フランス革命期の国民公会のスローガンが「単一不可分の共和国」であったことを忘れてはならない。このスローガンをエンブレムなどの表象をとおしてつねに叫び続けねばならなかったのは、現実のフランスが多様であり、多民族であり、多言語であったからである。

ナポレオン法典の編纂者の一人ジャン・ポルタリスは、さまざまな慣習法をまのあたりにして、フランスは「多数の社会からなる一個の社会」というありさまであったことに一驚している。フランス革命史家のジョルジュ・ルフェーヴルも、旧制度下のフランスを観察して、「あらゆる点でフランスは多様であった」ことを確認している。⁽⁴⁾ ミシュレは、二月革命の予兆の前で「地方的特性が今日まで破壊不能なもの」としてあり、「フランスは百のお国言葉に分かれている」ことをコレージュ・ド・フランスの講義のなかで語った。一八六三年でも、フランス語を話せないフランス人が七五〇万人もいたのである。ミッテラン前大統領も「フランスは、人を戸惑わせるほど多様性のある国です。共和国大統領としての私の使命は、たえず努力しなければ散乱したままになりがちな一国のさまざまな要素をふたたび集め統合することです。それはこの国の統一を表明しかつ保障することであり、それによって国の不可分性を守ることなのです」と語っていた。⁽⁵⁾

だからフランス革命以来、種差をとまなう個性を持った具体的なフランス人ではなくて、均質的で抽象的な「国民」としてのフランス人を創り出さねばならなかったのである。ミシュレが一八四六年に歴史家エドガール・キネーへの手紙のなかで、「一つの人民！ 一つの祖国！ 一つのフランス！ それこそが必要なのだ」と叫んだとおりである。⁽⁶⁾

フランス革命でその機能を果たしたのは革命祭典だ。革命政府は一連の祭典を挙行して、共通の言語や文化をもつ「想像の共同体」を創り出し、国民国家という虚構ないし擬制を創り出したのである。ミシュレの『フランス革命』は、一七九〇年七月一四日の連盟祭を叙述するにあたって、フランス国民の「統一」と「団結」、「和合」と「融和」の姿を熱情的に描いている。⁽⁷⁾ ホブズボームも述べるように、伝統というものは創り出されるのである。

こうしてナシオンを創出した「せかされた国民」の犠牲になったのが、少数言語地域の人びとであった。フランス革命期でも、一七九〇年にグレゴワールが方言の調査を始め、方言や地方語は反革命と連邦主義の道具として非難的になった。公安委員会委員のバレールは一七九四年一月に「連邦制度と迷信は低地ブルトン語を話し、亡命と共和国憎悪はドイツ語を話し、反革命はイタリア語を話し、狂信はバスク語を話す」と糾弾し、司教タレーランも、「言語の統一は国家の統一の基本条件である」と語っていた。⁽⁸⁾ 政治制度から度量衡にいたるまでパリを頂点とした「統一」を求める力がローラーとなって、フランス全国の地域差をならしていこうとしたのである。一八〇六年から内務省統計局が言語調査を企てたが、その中心人物の一人コクベール・ド・モンブレが、革命政府の度量衡委員会でメートル法の確立に尽力した人物であったことは象徴的である。⁽⁹⁾

フランス革命は、ルソーが『コルシカ憲法草案』のなかで述べていたことを実現しようとしたかのように進化した。ルソーは、「国土をできるだけ均等に地ならしすること」を述べ、「その土台の上に構築すべき建物の設計図を引くこと」を課題としてあげ、「われわれが従うべき第一の準則は国民的性格」であり、「どんな人民でも、一つの国民的性格を持つており、あるいはそれを持つべきである。もしそれを欠いている人民があれば、まずもってそれを彼らに賦与することから始めなければなるまい」と語っていたのである。⁽¹⁰⁾ 「国民的性格」を賦与することで地域差をなくし、「国民」を創り出そうというのである。たしかに差異の消滅はコンセンサスを生む必要条件であるが、差異の体系の破壊

が安定をもたらすとは限らない。カオスを生むこともあるからだ。事実、地域差を消滅させようとする圧力は、地域主義や分離主義などの反作用を生んだのである。

フランス名でアルザスと呼ばれ、ドイツ名でエルザスと呼ばれる地方もそのような地域のひとつである。ただし、アルザスはフランスとドイツのはざまに位置し、一八七〇年以来四度も国籍が代わり、そのつど国境が移動したこと、経済的には豊かな「北」、すなわち、ル・アーヴルとマルセイユを結ぶ線より上に属したことなどの点で、ブルターニュやバスクやコルシカなどの他のフランス地域とは立地条件を異にしている。今日では、フランスという国民国家の枠をはみ出し、ローカルがナショナルを越えてダイレクトにグローバルと結合するのがアルザス地域の特性である。

それでは、フランスからは国民(Nation)としての後天的な忠誠が要求され、ドイツからは民族(Volk)としての一体性が強調されたアルザスの今日までの歴史を素描することで、国民国家と民族問題について、換言すれば、地域主義とナショナリズムの問題についての材料を提供しよう。それは、政治統合の三段階（編入・同質化・コンセンサスの創出⁽¹⁾）の煉獄をくぐり抜けたアルザスに、新たなアイデンティティーが誕生する可能性を確認する歴史でもあるだろう。さらにアルザスの事例は、アルザスという特殊を越えて、「中央 対 周縁」「地域 対 国家」という近代とともに確立した地政学的パラダイムのイデオロギー性を確認する歴史でもあるだろう⁽¹²⁾。

一 仏独による編入

1 フランスによる編入

ドゴールは一九四四年から一九六四年にかけてアルザスを一二回訪問している。ドゴールが、これほど頻繁に訪れた地方はフランスにはない。ストラスブールが解放されたときのドゴールのメッセージには、「アルザス人とロレーヌ人はもつとも苦しんだがゆえに、またフランスのために戦闘の最先端にいたがゆえに、彼らはこれほど国民(Nation)の心に近かったことはない。三色旗がメッスとストラスブールに翻った。ふたたび自由となりつねに栄光に満ちたフランスは、解放されたアルザスとロレーヌを母親のように引き取る」とあった。ドゴールは、引き離されていたわが子が母親の元へ帰ってきたという「ファミリー・ロマンス」によって、ストラスブール住民に訴えかけたのである。またドゴールは、ストラスブール解放一七周年の式典が開かれた一九六一年一月二三日に、今度は大統領として「フランスには国民意識がほかのどこよりも高らかに語られた地方があります。……ストラスブールはそのような地方の一つであります」とアルザスを讃えた。⁽¹³⁾ドゴールがこれほどアルザスに心を砕いたのは、アルザスの歴史とかかわっている。

フランス東部に位置するアルザスは、一六〇万人の人口を持ち、国土面積の一・七パーセントを占めている。ヴォージュ山脈によってパリ盆地に背を向け、フランスから「孤立した地方」であり、ドイツのバーデン地方や、ライン河をおしてスイスのバーゼルやオランダとの結びつきのほうが強い地域である。⁽¹⁴⁾このため人種、言語、習慣の点で

アルザス人は、バーデンのドイツ人やスイス人と近いが、少数派ではあれフランス語地域のアルザスも存在した。アルザスと一口に言っても、北部にはルター派のプロテスタントが多く、南部にはカトリックが多いという相違があった。アルザスのプロテスタント人口は、フランスの全プロテスタントの半数ちかくを占めた。それにユダヤ教徒も比較的多いアルザスは、宗教的には仏独のハイフンの役割を演じたのである。⁽¹⁵⁾ それでも農村のプロテスタントには、親独的空氣が強かったし、第三共和政フランスの世俗化政策を目撃したカトリックの主任司祭のなかにも、親独派になる者も現れていた。⁽¹⁶⁾ このような言語と宗教こそが、アルザスの個性であった。アルザスは政治的にもフランスとドイツのハイフンの役割を演じることを望んだが、仏独という大国のはざままで政治の荒波に翻弄されたのである。

アルザスは、一六四八年のウェストファリア条約によってフランス領になった。一七世紀にフランス語が公用語とされたが、ブルボン王家はアルザスのフランス化を強制しなかった。通商圏も狭い当時の社会にあつては、アルザス人もアルザス語で生活の用は足せたので、一般アルザス人にとってフランス語を学ぶインセンティブは働かなかった。フランスからやってきた官吏も、ヨーロッパの上流階級の国際語がフランス語であつたがゆえに、ドイツ語を学ぶことに熱意もなかった。ヴォルテールが一七五三年にアルザスのコルマールに滞在したとき、彼はコルマールの町を「半ばドイツ的、半ばフランス的、まったく訳の分からない」町だと形容していた。⁽¹⁷⁾

したがって、この地域が真にフランスを意識するのはフランス革命からである。アルザスの政治文化の一つが、フランス革命に由来するというのもあながち間違いではない。アルザスが今日あるように、バ・ラン県とオー・ラン県の二つに分割されたのは、一七八九年一二月のことだし、オー・ラン県の商工業都市ミュールーズがフランスへの併合を決議したのは、一七九八年一月のことであつた。また一七八九年四月八日にストラスブール市は、一三八項目からなる陳情書を作成して三部会に提出したが、そこには市民の自由などの普遍的な要求と同時に、印紙税の免除などの特

権の維持というアルザス地方の特殊な要求が並べられていた。⁽¹⁸⁾ 一七九〇年七月一四日の連盟祭への参加や、後に国歌「ラ・マルセイエーズ」として知られることになる「ライン軍のための軍歌」が、ストラスブルで作曲されたところにも民衆的愛国心の発酵状態やアルザスのフランスへの着床状況が分かるであろう。⁽¹⁹⁾ フランス革命によって解放されたアルザスのユダヤ人が、フランス共和国への愛着を強めるのはコロラリーである。だから、ナポレオン失脚後の復古王政にはためらいが示された。

しかし、一九世紀に入ってもアルザス語は迫害を受けなかった。コルシカ語を母語とするナポレオン一世が、アルザスにフランス語を強要することはなかったし、七月王政のルイ・フィリップもアルザスのドイツ語に寛大であった。アルザスでは、ナポレオン一世は「ナピ」という愛称で呼ばれていた。ルイ・フィリップは御幸中にアルザスの農民代表とドイツ語で話そうと努めたし、ナポレオン三世もドイツ語方言を話しても立派なフランス人たりうることを述べていた。ただ行政サイドから、行政的統一の証しを言語的統一に求める声が挙げられていた。行政的効率の観点からは、公文書にドイツ語がまかりとおり、フランス語からドイツ語への誤訳が頻繁にある状態は放置しえなかったからである。さらにアルザスでは、フランス語能力の有無が階級差となって表れ、言語的差異と階級的差異がオーバーラップしはじめた。これを避けるためにもフランス語の民衆化が重要な課題となったのである。しかも鉄道網の整備による金属工業や綿工業の発展は、商売や就職などの点でフランス語修得のメリットをアルザス人に教えた。⁽²⁰⁾ つまり、言語はアイデンティティーの確認という「帰属への権利」とかわるだけでなく、言語を媒介手段として個人が社会移動するための「選択への権利」ともかわったのである。⁽²¹⁾

このことは、「ゲルマン精神を覚醒させ、それを維持し鼓舞することを望む雑誌、ドイツ語によってゲルマン様式を表明することを願う雑誌」と自己定義した親独派の雑誌『エアヴィニア (Erwinia)』のマニフェストにも窺うことがで

きる。⁽²²⁾一八三八年にこの雑誌は、「われわれはフランスの幹に接ぎ木されたドイツの枝である。……政治的に言えば、われわれはフランス人であり、そうあり続けたい」とか、「アルザスとフランスを引き離すことは不可能」であり、昔は奇妙に響いた「フランス語にアルザス人を慣れさせた」と記した。さらに、「フランス文化の色調やフランス語の支配は好ましいだけではなくて不可欠である」と述べ、特に「出世や国家公務員を希望する者には必要だ」と語ったのである。

2 普仏戦争の衝撃

こうしてフランス化が進行していたアルザスにとって、普仏戦争が運命の分岐点となった。フランスにとって普仏戦争の敗北は、一八一五年のナポレオン以来の敗北であった。ナポレオンの敗北は対仏大同盟との敗戦であったので、プロイセン一国にフランスが敗れたのは、前代未聞の椿事と言ってよく、しかもアルザスとロレーヌ北部の割譲をドイツに要求されたことは屈辱以外のなにものでもなかった。フランスも敗戦によって、第二帝政から第三共和政への政体の転換を見ることになる。

一八七一年二月一七日にボルドーで開かれていた国民議会で、アルザス・ロレーヌ選出の議員は、「アルザス人とロレーヌ人がフランス国民の一員にとどまる権利」を主張したが、ドイツは歴史や種族や言語的一体性を訴えて取り合わなかった。三月一日に国民議会は「ボルドー宣言」を発する。そこには、「共通の家族から今引き離されたアルザスとロレーヌの兄弟たちは、フランスがふたたびそこに場を占めるときまで、彼らの竈を欠いたフランスに親族的な愛情を保つだろう」とあった。⁽²³⁾

五月一〇日に調印されたフランクフルト条約で、アルザスは正式にドイツに割譲された。アルザス人は、一八七二

年一〇月一日までに内地フランスに移住することを条件にフランス国籍を選択することも認められ、一六万〇八七八人がフランス国籍の取得を希望したが、実際に移住したのは四万九九二六人であり、⁽²⁴⁾移住者には、土地を持たない都市在住者、カトリック、フランスで容易に職にありつけそうな者やドイツでの徴兵を忌避した青年、フランスとの関係が経済的文化的に密な都市在住の豊かなユダヤ人などが多かった。有産ユダヤ人にとって、反ユダヤ的ドイツと市民権を付与してくれたフランスとの間の選択に迷いはなかった。アルザス人はドイツ嫌いではなかったが、南ドイツ同様にプロイセン嫌いであった。だから一八六九年夏の『バ・ラン通信』に、「われわれはプロイセンやその政府の友人でも賞賛者でもない」し、「ドイツ的要素がプロイセン的要素に影響を及ぼすこと」を期待すると、反プロイセン感情が表明されたし、同様な心性は、アルザス美術館の推進者の一人であったロベール・レスロ(Robert Redslob)にも見られた。彼は、フランスに愛着を持ち、プロイセンとの和解を拒否しつつも、ゲートやシラーやベートーベンの「古いドイツ」への憧れを断ち切れなかったのである。⁽²⁵⁾

とまれ普仏戦争以後、アルザスはフランスの政治的国民的結節点、「国民的賭け金(Enjeu national)」になった。「盗まれたアルザス」「ふさがない傷跡」「虜われの地」といった言説があふれ、アルザスはフランス人にとってナショナリズムのシンボルと化し、共和主義的愛国心は失われた地方の思い出と不可分となった。アルフォンス・ドーデの小説「最後の授業」(『月曜物語』所収、一八七三年)や第三共和政期の小学校の副読本となった『二人の子供のフランス一周』の持つイデオロギー性はよく知られている。「最後の授業」は、ドイツ軍の占領でフランス語が明日から使えなくなった学校のフランス語による最後の授業風景を感動的に描くが、この地域の母語はフランス語ではなかった。後者の副読本は、二人の子供が割譲されたロレーヌの町を抜け出てこっそりとヴォージュ山脈を越え、マルセイユにいると言われた叔父を訪ねてフランスを一周する話である。旅の起点がアルザス・ロレーヌ地方であるところに、時

代のナショナリズムの反映を窺うことができる⁽²⁶⁾。また、第二帝政期のパリに大規模なアルザス風のカフェレストランが開店したが、一八七一年以後には、アルザス風シークルと並んでそのカフェレストランは失われた地のシンボルとなった⁽²⁷⁾。さらに、プロイセン軍の撤退後もない一八七三年にパリに設立された私立学校の名が「アルザス学院」であり、ジュール・フェリーの支援を得て教育方法の実験校の役割を演じたことは、当時の雰囲気⁽²⁸⁾を彷彿とさせる。

このように普仏戦争後のフランス人の第一世代にとって、アルザスは奪われた地方であり、その回復、すなわち、失地回復運動(irrédentisme)的対独復讐は外交上の喫緊の争点であった。デルレードの『兵士の歌』(一八七二年)が、半年で五〇刷ちかくも出たことが示すように、社会における軍事的価値の評価が高く、普仏戦争後の国民的団結は兵士崇拜のなかで強められた⁽²⁹⁾。しかし時とともに対独復讐と好戦的空気は鎮まっていた。植民地獲得が外交目的の優先順位の上位を占めたこと、一八九〇年からは左翼の間に平和主義が浸透したこともあり、多くのフランス人もアルザスの再征服の可能性を信じなくなったし、アルザスでも有力な自治派ジャック・カブレが死去したことや反ドイツ結社の解散などによって、ドイツ批判のヴォルテージュは下がった。アルザスの政治家や知識人は、一八九〇年以後には、不毛な全否定主義から抜け出す道を模索しはじめるのである。

それでも、この地域に対するフランスからの情緒的関心は消え去ることはなく、それをもっともよく示したのが、「大地と死者」に根づいた国民という神秘的観念を広めたモーリス・バレスであった。ロレーヌ地方に生まれたバレスは『ドイツに仕えて』(一九〇五年)のなかで、ドイツの制服を着たアルザス人を「侵略者の長靴の下にあるフランスの小石」と描写し、征服者を前にしても自由で誇り高いフランス的アルザスを称揚していた⁽³⁰⁾。さらに一九一四年の第一次大戦前夜には、バレスやポール・デルレードが率いるナショナリストたちが、コンコルド広場にあったストラスブールの像に黒いリボンをつけた花輪を捧げるといった示威をして、アルザスの失地回復の意志表示をしたことが

あつた⁽³¹⁾。

3 ドイツによる編入

征服にせよ割譲にせよ、新しい国家に編入された地域住民にその国の文物の最良のものを指し示して支持や恭順を得ようとすることは、いわば統治の常套手段である。当時、ドイツがフランスより優っていた分野は科学の領域であった。普仏戦争の敗因として、ドイツの大学の優秀さが挙げられていたほどである。カイザー・ヴィルヘルム大学と名称を代えて一八七二年五月に再開したストラスブール大学は、フランスに対するショー・ウインドーの役割が期待された。事実、その教授陣には「ドイツ精神のパイオニア」たることが要求され、歴史学のマイネッケ、経済学のシュモラー、社会学のジンメル、物理学のレントゲンとブラウンなどの優秀な人材が集められた⁽³²⁾。

一八八〇年代にビスマルクの医療や労災などの社会保険が制定されたり、劇場でもドイツの作品しか上演されなくなったが⁽³³⁾、ドイツ第二帝政下のアルザスでは、ナチ占領下のようなゲルマン化が推進されたわけではなかった。建て前としてはゲルマン化は掲げられ、一八七一年には小学校でのフランス語の使用が禁止されたが、混乱を惹起した一八六〇年代の南ドイツの文化闘争の記憶はビスマルクにもなお鮮明であつたはずだ。一八七〇年代には金融面では、ミュールズ銀行をととしてフランスとの関係は続いたし、工業面でも、ミュールズに設けられた「アルザス権益擁護委員会」がフランスとアルザスの経済的連帯を表明していた。ドイツ市場へのアルザスの適応は、一八八〇年頃に順調に進んだのである⁽³⁴⁾。一八七一年から一九一四年までにアルザス・ロレーヌに移民してきた者の数は、約四〇万人であり、一九一〇年の住民調査によると、アルザス人口一二〇万人の内、一三万一〇〇〇人がドイツ生まれであつた⁽³⁵⁾。法制度の面でもゲルマン化は進まなかった。ドイツ領になった後も「フランスの諸法はその効力を保持」し、一八

○二年に締結された政教条約たるコンコルダートが存続した。つまり内地フランスでは、一九〇五年の政教分離法によってコンコルダートは廃止されたが、アルザスはそれを経験しなかった。教育の分野でも同じことがあり、アルザスには一八五〇年のファルー法がそのまま効力を保っていたのである。もともと、一八九六年に制定されたドイツ民法典や一九〇八年の帝国結社法などは、アルザスにも施行されたが、ドイツの結社法にはフランスのそのように修道会の禁止措置は含まれていないのである。⁽³⁶⁾ドイツ語の使用が一八八八年にアルザスの全市町村に義務づけられたが、フランス語系市町村ではフランス語が依然として教育言語であった。一九一一年の法律でも公用語はドイツ語と定めつつも、フランス語使用地域にはフランス語の使用を認めたのである。このためドイツがアルザス全土にドイツ語を課したのは、なんと第一次大戦中の一九一七年のことではない。ドイツの税務署が課税通知を仏独二カ国語で作成したのは、背に腹は代えられなかったからである。⁽³⁷⁾

それでも一八八七年八月に、ミュールーズの植木屋が赤・白・青の三色帽子を公然とかぶったことで三カ月の禁錮刑に処せられていた。⁽³⁸⁾おそらく、フランスで対独復讐的なブーランジスムが吹き荒れたことへの見せしめであったろう。ドイツへの編入によって生じたこうしたアルザスの不満は、かつてアルザスとロレーヌのドイツへの併合に反対した社会民主党員のアウグスト・ベーベルの当選に貢献する。しかしベーベルの当選も一種の間接的ゲルマン化と言つてよかった。というのも、アルザスの社民党組織はバーゼルの党に従属していたからである。⁽³⁹⁾一八七〇年代前半のアルザスには、フランス派の「アルザス同盟」やドイツ人との平等な権利を求めるドイツ寄りの「エルザス国民新聞(Elsässer Volksblatt)」があったが、一九世紀から二〇世紀の結び目の前後一〇年の間は、カトリックから社会主義者までの新聞や政党が叢生した時期である。

またドイツは、司祭の養成機関からフランスの影響力を抜き取り、ドイツ文化とカトリシズムが両立しうることを

示すために、ストラスブール大学にカトリックの神学部を設置したが、ゲルマン化推進のためのこの措置は逆にカトリック政党を勢いづかせ、カトリック派は二〇世紀初めに連邦国家の要求を出すまでになった。これが自治や普通選挙をめぐる議論を再燃させることになる。自治の要求は、フランスとの自己同一化でもなく、ドイツ民族とのアイデンティティーでもなく、アルザス人のアイデンティティーとかかわっていた。しかし自治論争はひとつにまとまることはなく、政治潮流によって多様であった。アルザスは、帝国議会(Reichstag)にも連邦参議院(Bundesrat)にも代表を持たなかったが、ブルジョア政党の民主派は普通選挙や比例選挙を要求しつつも主権を強調しなかったし、リベラル派にあつては自治は同化の前段階と考えられていた。もつとも、一九〇四年創刊のリベラル派の新聞『アルザス・ロレーヌ新聞』のように、一九一〇年七月八日号で、自治とはアルザスの独自性の擁護であらねばならないと明言したのもあった。他方、フランスの革命的伝統を継承するはずの社会主義者は、ドイツの枠内でのアルザス・ロレーヌ共和国を望んだ。その他、アルザス人のアルザスを要求し、地域主義の文化的次元にアルザスの独自性を見いだし、それをゲルマン化からの防波堤と考えた潮流、ドイツ帝国内での同等の権利と憲法による保障という枠内でドイツへの加入を交渉しようとする潮流、アルザス問題をヨーロッパの平和や仏独和解の観点から考察した潮流などがあつた⁽⁴⁰⁾。このように議論が百出して集約不可能という政治文化は、フランスに近いものであった。

ドイツによってアルザスになされたもつとも重要な決定は、一九一一年五月二六日に部分的自治を認めたことである。この日ドイツの帝国議会は、アルザス・ロレーヌに邦憲法を可決し、アルザスの邦(Land)昇格と二院制の邦議会の設置と連邦参議院への代表選出を承認した。邦議会は、男子の普通選挙によって選ばれた六〇名の議員(この内の四〇名はアルザス人)からなる下院と、皇帝によって任命された者とアルザスの社団の代表からなる上院から構成された。もつとも、邦憲法は邦議会が可決した法律に対しても皇帝の拒否権を認めたとし、アルザスを連邦国家と見なさ

なかったので、アルザスは完全に独立した邦の地位を認められなかった。結局、アルザスはドイツの特別地域にとどまった。なぜなら、連邦参議院にアルザス代表を任命する権限は皇帝が勅任した総督に属したし、邦議会は立法権を総督と共有したからである。

これに不満な中道派の自治主義者は、一九一一年六月四日に「コルマル集団」を旗揚げして、「ドイツ国家のなかで他の邦と同等の独立を享受するアルザス・ロレーヌ国家の建設」を訴える宣言を公表した。この実現のために六月二九日、アルザス・ロレーヌ国民連合が結成され、「二言語の使用と二文明との接触が形作るアルザス・ロレーヌ人の個性の絶対的尊重」を強調した。このような自治を求める戦いは、カトリック教会の公認と民主主義の推進とゲルマン化の拒否という三つの要求のもとに展開されるであろう。一九一二年一月の選挙で、邦憲法を支持する候補が落選して自治派が当選したことは、ゲルマン化の失敗を告げるものであった。⁽⁴¹⁾

一九一四年八月に勃発した第一次大戦が、アルザス問題を蘇らせた。というのは、フランス政府は同年一二月に、アルザスとロレーヌの回復を戦争目的に掲げたからである。さらに、大戦はアルザス人に国家への忠誠の問題を突きつけていた。一万八四〇〇人のアルザス・ロレーヌ人がドイツを去ってフランス軍に加わったし、二二万人のアルザス・ロレーヌ人がドイツ軍に動員され、フランス内地にいた一万二〇〇〇人のアルザス人もフランス軍に志願していた。しかし、ドイツからは「フランス野郎」、フランスからは「プロイセン人」と見なされ、ドイツ軍からも信用されないアルザス兵は脱走しえない東部戦線へ送られた。一家の兄弟同士が敵味方にわかれて戦い、戦死するという悲劇も生じた。⁽⁴²⁾

かくして、国家への忠誠心もフランスとドイツの間で引き裂かれた。このような運命は、アルザス出身の著名人の人生模様表れている。アフリカで医療活動に従事していたアルベルト・シュヴァイツァーはフランス当局に逮捕さ

れたし、カトリック系自治派の帝国議會議員エミール・ウェテルレはパリに逃走し、邦議會議員のピエール・ビューヒャーはスイスでフランスの工作員となり、議員のジャック・プライスはドイツに亡命させられてそこで死去し、カトリックのヘギー神父は一九一七年末までドイツ軍兵士として動員されていた。戦争開始とともにストラスブールやモルスハイムでは、三〇〇〇—四〇〇〇名のアルザス人が逮捕、拘禁、追放の憂き目をみだし、新聞の検閲も始まり、「アルザス・ロレーヌは予防拘留の古典的な国になった」と言われた⁽⁴³⁾。

それでもアルザス人の戦争協力が幸いしたのか、第一次大戦末期にドイツ宰相はアルザスに完全自治を与えた。一九一七年初めからベルリンで、アルザスとロレーヌの新たな法的地位をめぐる議論がなされていた。プロイセンへの併合、領土分割、自治、現状維持の四つの可能性について検討がなされ、自治案が帝国議会で関心を集めた。このため、七月末にアルザスのカトリック派が邦議会の召集を計画したが、総督は一二月にプロイセンへの併合の結論を打ち出した。しかしその後も種々の議論がなされ、一九一八年一〇月にドイツ第二帝政最後の首相マックス・フォン・バーデンによって、アルザスとロレーヌは自治を与えられた⁽⁴⁴⁾。かくして長らく待望された自治運動の目的を達成したが、それもドイツ軍の敗北で一炊の夢と化した。休戦後、フランス兵がライン河へもどってきたのである。

このように第一次大戦終了までのアルザスは、フランスとドイツによる編入を被ったが、同質化を求めるローラーの力はいまだ強くなかった。ドイツの連邦制それ自体が、同化に対するブレーキとして作用したのである。そのようなで自治に活路を求める勢力が伸張し、現実には休戦直前に自治を獲得したことは、アルザス人に戦後世界の新しい秩序作りに期待を抱かせるものであった。一九一八年一〇月下旬に、「アルザス・ロレーヌ問題は国際問題となった」とか、邦議会でも、きたる講和会議でアルザス・ロレーヌの利益を擁護するために自治が必要であることが語られたのである。もちろん、アルザスの運命を住民投票にかけることが提案されたり、フランスとの合併案が出されたり、

逆に反教権的フランスはカトリックのアルザスに文化闘争(Kulturkampf)を仕掛けてくることが懸念されもした。こうして一月上旬には、中立的な連邦国家の宣言ビラや、自由で中立的なアルザス・ロレーヌ共和国のアピールやフランスへの復帰などが提起された。十一月九日にストラスブールでも、ドイツ水兵がドイツ革命に連動した小規模な革命を引き起こし、ソビエトが樹立されようとしていた。邦議会は国民評議会(Nationalrat)を名のり、一二日には行政代表団を選任した。しかし誕生したばかりのアルザス自治政府は、機構も権威もいまだしの状態であった。クレマンソー政権によって、一二月に国民評議会は解散させられ、アルザス・ロレーヌ高等評議会が設けられたが、公務員からなるそのメンバーの大半は内地フランス人であった。⁽⁴⁵⁾

二 国民性の定義

1 ミシュレとフュステルの定義

仏独関係史上、ナシオンの定義をめぐる議論のピークは、普仏戦争後のアルザス割譲に端を発している。ドイツの歴史家テオドル・モムゼンとフランスの歴史家フュステル・ド・クラランジュとの論争や、エルネスト・ルナンとドイツの神学者ダーヴィット・シュトラウスとの往復書簡は有名である。ドイツではフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』（一八〇八年）がすでに言語的同一性を主張していたが、種族と言語の共通性を強調した「国外ドイツ人(Volksdeutsche)」の国民概念が優勢であった。民族の強調は、ヴントの民族心理学やプレッツの民族衛生学などの諸学の勃興と符節を合わせている。

フランスにもジュール・ミシュレのように、ドイツと同じ土俵にのった議論もあった。彼は『フランスの景観』（一八三三年）のなかで、フランスの歴史的アイデンティティーを言語に求め、「フランスの歴史はフランス語から始まる。言語は民族性の根幹をなす印」と捉え、それゆえ「フランス語はロレーヌで終わりだ。私はその向こうに行こうとは思わぬ。山を越えてアルザスを見るのはやめておこう。ゲルマン的世界は私には危険だ。そこには祖国を忘れさせる強力なロータスの実がある」と語ったのである。⁽⁴⁶⁾

一八七一年にアルザスがドイツに割譲されたとき、フランスでナシオンとは何かという議論がなされた。ロマンス語学者でコレージュ・ド・フランス教授のガストン・パリスは、パリ砲撃のさなかの一八七〇年二月九日の講義のなかで、国民の定義を語っていた。⁽⁴⁷⁾ パリスよりインパクトがあったのは、八年ほどストラスブル大学に勤務したところのあるフステル・ド・クーランジュである。彼は、普仏戦争後にモムゼンに対して「あなたがフランスを攻撃するために歴史研究を放棄した」ように、「私はあなたに答えるために私の歴史研究をやめる」と手厳しく反論を始めた。⁽⁴⁸⁾ フステルは、「アルザスはフランスに属するのか、それともドイツに属するのか」と問題を提起し、モムゼンの議論を検討する。モムゼンが「国民性の原理」を種族と言語の同一性を求め、アルザスは一七世紀にフランス帝国主義によって容赦なくドイツから引き離されたのだという議論を展開したのに対して、フステルは「もし国民が種族に対応するとするなら、ベルギーはフランスに、ポルトガルはスペインに、オランダはプロイセンに属するだろうし、逆にスコットランドはイギリスから切り離され、スイスは二分されるだろう」とモムゼンの種族理論を批判した。さらにフステルは、「フランスでは五つの言葉が話されているが、誰も国民的統一に疑いを抱く者もない。スイスでは三つの言葉が話されているが、あなたはスイスに愛国心が欠けていると言うだろうか。他方、アメリカでは英語が話されているが、かつてイギリスに結びつけていた国民的絆をアメリカが再建したがっていると、あなたは思う

だろうか。ストラスブールではドイツ語が話されていることをあなたは自慢するが、初めてラ・マルセイエーズが歌われたのは、ストラスブールであったことも同様に真実だ」、と言語が国民性の記号ではないことを述べた。

要するに、国民を形成するものは「種族でも言語でもなく、思想、利益、愛情、記憶、希望の共同体を人びとが持つときに同一国民であることを実感するのだ。……人種と言語の点でアルザスはドイツ的かも知れないが、国民性と祖国への気持ちの点ではフランス的だ」と述べていた。そしてアルザスをフランス的にしたのは、ルイ一四世ではなくて一七八九年の革命だと語り、ドイツと共通なものをアルザスはなんら持たず、アルザスにとって祖国とはフランスにほかならないと、民族自決理論に依拠して述べるのである。つまりフュステルにとって、国民を決定するものは意思と選択の問題であった。

ミシュレも一八七一年には、フランスという「生体から、つまり最強の組織的統一体からアルザスとロレーヌをめぐり取った」ドイツの攻撃を指弾し、『ヨーロッパを前にしたフランス』のなかでも、ドイツ語とゲルマン方言であるアルザス語は異なることを主張して、ドイツによるアルザス・ロレーヌの併合に反対した。⁽⁴⁹⁾この議論は、ドイツが言語的共通性を国民性の中心に据えてきたことへの反論として考えられたのであろう。アルザス語をドイツ語から区分したのは、ミシュレが最初であった。

2 ルナンとラヴィスの定義

『イエス伝』の著者もフュステルと同様の議論を展開した。一八七一年に「ドイツはわが師であった」と告白し、自己の内のよりよいものをドイツに負っていることを意識していたエルネスト・ルナンも、⁽⁵⁰⁾一八七〇年九月のシュトラウスとの手紙のなかで、「国籍はすべて妥協の産物」であり、政治的国境と言語的国境を無理に一致させれば、「際限

のない戦争への門が開かれる」と警告し、ドイツの思想や方法論や書物はアルザスを経由してフランスに到達するがゆえに、「フランスへのアルザスの合併はゲルマン主義の宣伝にもっとも貢献している」と詭弁を弄した。さらに一年後にもルナンは、「国民と種族は同義語ではない」ことをスイスの例を挙げて説明し、「住民の誓約のない併合は誤りであり、犯罪ですらある」と述べ、住民投票のない併合を批判した⁽⁵¹⁾。

またルナンは、一八八二年にソルボンヌの聴衆に向かって、国民を種族や言語、宗教、利害の共通性、地理、軍事的必要性などによって定義することを非難した。とりわけ、純血の種族の存在を否定し、「ドイツは純粋にゲルマン人の国なのだろうか」と、「種族 (race)」に傾斜しがちなドイツの議論を批判し、「過去においては共有すべき栄光と悔悟という遺産、未来に向けては実現すべき同一のプログラム」を持ち、「人びとが過去においてなし、今後もおなす用意のある犠牲の感情によって構成された大いなる連帯心」こそが、国民の必須条件だと語ったのである⁽⁵²⁾。

歴史家かつ教育行政官のエルネスト・ラヴィスは、一八九〇年の書物のなかで「われわれフランス人にとって、国民性とは人間の意思によって批准された歴史の所産である。国民性を構成する諸要素はその出自によって多様である。出発点は重要ではなくて、到達点こそがもっとも肝要なのだ」と語り、「アルザス問題」については、「かつてフランス人であり、今後もフランス人であることを望む人びとをわれわれから奪いつつ、征服者はわれわれの信念を傷つけた。……われわれに対してなされた不正を矯正することは、現代のもっとも寛大な感情と理性に対して与えられる満足となるであろう⁽⁵³⁾」と、やや国粹的な論陣を張っていた。

これに対して、普仏戦争後のアルザス人とロレーヌ人の抵抗に刺激されたプロイセン学派の歴史家トライチュケは、次のように語った。「われわれが要求するドイツの地域は、本性と歴史によってわれわれのものである。……われわれは彼らの意志に反しても彼ら固有の存在を彼らに与えることを望む⁽⁵⁴⁾」と。

3 国籍と国民性

この時期、フランスの議会でなされた国籍法の議論も国民性の議論と連動していた。それは、いかなる人間にフランス国籍を与えるのかという問題であった。一八八〇年代には、国籍法の議論は、血統主義 (*jus sanguinis*) と出生地主義 (*jus soli*) の原理的対立として顕在化した。この時期は、ブーランジスムが吹き荒れたように、よりナショナリスティックな血統主義的議論が議会でも展開された。女子中等教育に尽力した共和派のカミーユ・セーすら、「国籍は、わが領土での出生という偶然の事実ではなくて、血縁や血統に依拠しなければならない」と上院で発言し、出生地主義を「国籍の封建的原理」だと弾劾した⁽⁵⁵⁾。領域にもとづく出生地主義は、封建制の残滓だと批判された。とまれ、フランス国民の定義をめぐる議論が展開されていたのである。実際には、人口学的軍事的考慮から出生地主義との妥協がはかられ、フランスの国籍法はドイツ型の血統主義から袂を分かち、出生地主義が確立する⁽⁵⁶⁾。

このような議論を大西洋の彼方から観察していたリップマンは、一九二二年に出版した『世論』のなかで、古代にはガリアに属し、中世にはドイツに属し、近代にはフランス領であったアルザスとロレーヌの帰属をめぐる議論を紹介しつつ、「どの時代を原点に選ぶかによって、まったく議論が変わってくる」ことを述べ、「『人種』とか国籍にかんする議論にも、これとまったく同じ、ご都合次第の時間観がしばしば露呈される」と手厳しかった⁽⁵⁷⁾。

種族と言語に依拠したドイツの国民概念は、ある意味で、客観的で決定論的で集合的であった。他方、社会契約や人権宣言の伝統に根づいたフランスの国民概念は、主意的で偶然的で個人的であった。ドイツの国民性概念が、意思から独立した人類学的実態とのアイデンティティーを重視するのに対して、フランスは国民性を歴史的に形成された政治文化との自己同一化の行為の帰結として、取り消し可能な結果と見なした。国民性をめぐる議論で明らかになっ

た仏独両国のこのような相違は、フランスでは、革命による政治的統一の先行が言語的統一を要請したのに対して、ドイツでは、言語的統一を梃子にして遅れていた政治的統一を促進しようという近代化の文法の違いでもあった。⁽⁵⁸⁾

三 三色旗と鉤十字による同質化

1 マリアンヌによる同質化

第一次大戦終了から第二次大戦終了までの時期は、国民国家の同化圧力が高まり、仏独両国によってアルザスに同質化が強制された時期である。それはフランスから始まった。一九一八年一月九日にストラスブール市庁舎のバルコニーに立ったロレーヌ出身のポワンカレ大統領は、歓呼する群衆に向かって述べた。「国民投票はなされた」と。これは、戦争末期にアメリカがアルザスの帰属をめぐる国民投票の実施を提案したことに対して、フランスが拒んだことを踏まえたものである。エルネスト・ルナンの「国民の存在は日々の国民投票」だという言葉も、当然、念頭に置かれていたことであろう。⁽⁵⁹⁾

一九一九年から一九二四年までのフランス議会は、右翼勢力が多数派を占めた「軍服議会」と呼ばれた時期である。この時期のアルザスは、経済的にはマルクからフランへの、政治的には帝政から共和政への、行政的には連邦制から中央集権制への、社会的にはドイツ人からフランス人への移行期であった。戦争末期にふくらんだアルザス人の期待は、時とともにしほみ、逆にアルザス人の不安が高まった時期でもあった。

というのも、一九一八年の第三共和政は一八七〇年のフランスではなかったからである。一八七〇年には教会はな

お影響力を保ち、名士は制限されているとはいえ、なお活発な地域主義を育てていた。ところが一九一八年には政教分離が勝利し、政治権力はパリに集中していた。一九一一年にドイツが認めた自治制度は解体され、アルザスの統治は首都に移管された。これを正当化するために流された公式見解は、「ドイツは連邦国家だがフランスは単一不可分の共和国」だというものであった。この現実を前にアルザス住民の心境は複雑であった。カトリックの村はフランスへの復帰に熱狂したが、プロテスタントの村では慎重な態度がみられた。また、第一次大戦で動員されなかった一八七〇年以前のアルザスを知っている年配の世代は、フランスへの復帰に好意的であったが、若い世代は留保的態度を示した。

第一次大戦の休戦条約が締結されて四日後の一九一八年一月一日に、フランス政府はオー・ラン、バ・ラン、モーゼルの三県に共和国弁務官を任命したが、三名の誰もドイツ語ができなかった。まもなくして弁務官は一人になり、一九二四年七月に廃止される。一九一九年四月から翌年の一月までこの地位にあったアレクサンドル・ミルランは、アルザスの独自性を理解していた数少ない政治家の一人であった。彼は一九一九年十二月に高等評議会で地域評議会の設置に前向きな発言をし、首相となった翌年一月の下院にその法案を提出した。しかし、法案は地方分権に反対する右翼と反教権的左翼によって葬られ、ミルランは一九二〇年九月に諮問議会の設置で満足せねばならなかった。ミルランの後任のアルパチット弁務官も地方分権の必要性を理解したが、同化を強要する勢力のあとおしを受けたパリ政府は、弁務官の権限を召し上げただけでなく、一九二二年一月にはアルザスの金融局を、同年一〇月には郵便・電信・電話公社や河川森林監督局、法務局、土木局をパリに吸収した。⁽⁶⁰⁾

アルザスの三分の二の職の大部分は、アルザスに無知であるが高給に引きつけられてやってきた「内地フランス人」に与えられた。さらに戦後に雇用された公務員とそれ以前の公務員との間に心理的溝が生じた。なぜならフランスへ

の復帰は、フランス語を学ばねばならない初等教師や公務員に言いしれぬ屈辱感や劣等感を与え、内地からやってきた公務員は住宅手当も手厚くて、まるで植民地にいるかのようにふるまったからである。すでに一九一九年二月二日、フランス語は正式に法律用語となり、一〇月一七日にフランス法がアルザスに導入されていた。また、アルザス人とアルパプチットは二言語主義を望んだが、弁務官もフランス語が広まらない現実の前で後退せざるをえなかった。大学区長シャルレティは、フランス語教育を強化する通達を出すにいたる。一九二〇年一月の通達は、小学校の最初の二年間はドイツ語を教室から閉め出し、三年目から週三〇時間の内の七時間（宗教教育四時間と語学教育三時間）をドイツ語にあてるとしていた。この通達は抗議の嵐を巻き起こし、小学校におけるドイツ語教育が要求された。ドイツ時代でもフランス語地域は小学校入学時からフランス語が教えられていたからである。この時期、農村住民と都市の大半の住民はアルザス語を話し、ドイツ語は読み言葉かつ書き言葉であった。⁽⁶¹⁾

さらに、一九一八年一二月一四日からアルザスの住民は四つのカテゴリーに分類され、身分証明書を発行された。証明書Aは、両親と祖父母がフランスないしアルザスで生まれた者、証明書Bは、両親ないし祖父母の一方がドイツ人である者、証明書Cは、父方ないし母方の家系が戦争中にフランスの同盟国ないし中立国であった者、証明書Dは、敵国の外国人であるドイツ人に発行された。この分類はアルザス人に苦悩を強いた。なぜなら家族内でも、身分証明書が違ったからである。アルベルト・シュヴァイツァーがまさにこのケースであった。彼はストラスブル大学ドイツ人教授の娘と結婚していた。シュヴァイツァーの証明書はAであるが、配偶者の証明書はBであった。シュヴァイツァーの岳父はドイツ・ナショナリストであり、アルザスから追放された。一九一九年四月までに約三万人のドイツ人が追放の憂き目をみだし、七万人のドイツ人が自発的に立ち去った。この人種判別法廷は一九一九年一〇月に廃止された。また、フランスに住んでいたアルザス人は帰郷を許されたが、ドイツで監禁されていたアルザス人はヴェ

ルサイユ条約の批准まで待たねばならなかった。⁽⁶²⁾

三色旗のもとへ帰ってきたアルザス人のフランス語能力は、不十分であった。高等教育を受けている大学生すら、この例に漏れなかった。一九一九年一〇月に歴史家のマルク・ブロックがストラスブル大学に赴任して、歴史学以外に初級フランス語を担当したのも、アルザス人学生のなかにはフランス語が下手な学生もいたからである。⁽⁶³⁾

しかし、内地フランスからアルザスに乗り込んだ教授陣たちは言語的少数者であるアルザス地方の問題に関心はなく、同化政策の尖兵となっていた。だから、フランスに復帰後のストラスブル大学では、ドイツ語は追放され、アルザス語は無視された。歴史家のリュシアン・フェーヴルも、「引き裂かれたアルザスの忠実な奉仕者」になることを望んだが、「アルザスの精神的健康がひとえにわれわれの努力にかかっていることを自覚していた」と、一九一九年一月二二日のストラスブル大学の始業式に出席したときの感慨を記している。⁽⁶⁴⁾ この日は、ストラスブルへのフランス軍入城一周年記念日であり、ポワンカレ大統領臨席のもとに式典が挙行されたのである。フランスのストラスブル大学にかけける息込みを窺うことができる。ともあれフェーヴルの語る「アルザスの精神的健康」とは、その後の経緯から判断すれば、アルザスのフランス化を意味していた。ストラスブル大学文学部長でアルザス人のクリステイアン・プフィステルが、一九一九年にアルザス史講座を獲得して、フランス的なアルザス史の叙述と取り組んだのもその例である。⁽⁶⁵⁾

一九二六年のデータによると、フランス語地域のアルザス人は、バ・ラン県六七万五〇〇〇人の内の一二万二〇〇〇人、オー・ラン県四八万七〇〇〇人の内の一〇万人を数えた。つまり二割強の住民がフランス語を話していたのである。一九一〇年にはバ・ラン県の四パーセント、オー・ラン県の六・五パーセントしかフランス語を話していなかった。かかる状況を前に、一九二七年からはプフィステルが大学区長になり、アルザスのフランス語化が推進された。

彼は八歳からの二言語主義を提唱しもするが、小学生のフランス語の上達に満足し、フランス語の知識がブルジョアジーの特権ではなくなったことを讃え、内地フランスや植民地での就職を奨励したのである。⁽⁶⁶⁾

2 戦間期の自治運動

かかる状況下で、自治運動が戦間期の主要な政治運動となったことは驚きではない。三派の自治運動が当初よりあり、別々の目的を持った。第一に、最大の組織が一九一九年四月に誕生したドイツのカトリック中央党に当たる共和人民連合 (Union populaire républicaine 以下、UPR) であり、オー・ラン県を拠点としていた。その目標は世俗化を拒否した一八七〇年以前のフランスの宗教政策を維持することであった。綱領には、一世紀に及ぶアルザスの歴史のなかで獲得された自由や権利の維持、地方分権の実施、コンコルダートと修道会系学校の維持、女性参政権を含むフランスの選挙制度の拡充、国民投票や二言語主義などが掲げられていた。メンバーのヨゼフ・ロッセ議員は、ラインラントの分離主義運動から示唆を得たカトリックのラインラント国家を夢見ていた。ラインラントの分離主義運動には、ケルン市長のアデナウアーも関与していた。一九二三年六月には、教会の権利擁護をめざす「カトリック同盟」が組織された。⁽⁶⁷⁾

第二に、急進党の流れをくむカミーユ・ダーレと元牧師のジョルジュ・ウォルフを指導者とするアルザス進歩党 (E. sässische Fortschrittspartei) である。バ・ラン県を中心とした進歩党は、UPRと異なり世俗性に特徴があった。一九二六年一〇月に結党されたこの党は、アルザス文化や言語の維持を望んでいたが、フランスへのアルザスの再統合を目的としていた。さらに三権分立の強化や女性参政権やドイツとの和解におけるアルザスの役割の強調などを掲げていた。⁽⁶⁸⁾ 第三に、カール・ロースのラント政党 (Landespartei) とシャルル・ユベールやジャン・ピエール・ムレール

といった共産党系の労農党である。ともにルター派の親ドイツ市町村やストラスブールの産業地域を拠点とし、その目的は、法律で保障された自治やフランスからの分離であった。この第三グループは、ナチス・ドイツへの統合すら望んでいた。内地フランス人の目には、戦間期アルザスの自治運動は、フランスからの分離独立やドイツとの結合を志向していると映った。これらの自治運動とパリの中央政府との衝突は不可避であった。

一九一九年十一月の下院選挙では、「国民ブロック」のもとに連合したカトリックのUPRとブルジョア政党でプロテスタントの民主派が圧勝し、急進党と社会党の左翼は惨敗した。民主派は二言語主義とアルザスの現状にみあった政教分離を主張していた。アルザスに割り当てられた一六議席の内、九議席をUPRが獲得し、残りの七議席を民主派が得て「国民ブロック」が独占したのである。しかし一九一九年選挙は、アルザス問題をほとんど解決できなかった。一九二四年の下院選挙では、両派が多数派を占めたことに変わりはないが、それでもUPRが八議席、民主派が五議席と議席を減らした分を、社会党が一議席を確保していた⁽⁶⁹⁾。

全国レベルでも一九二四年の選挙は左翼に票が流れ、左翼連合を率いるエリオ急進黨内閣が成立するが、アルザスに対する態度は前政権と同様であった。左翼連合政権もアルザスに同化政策を強いて、弁務官の職を廃止し、反教権立法やアルザス語の抑圧を実行したのである。同年六月一七日にエリオは、「アルザスとロレーヌに共和国の法を導入する」決意を表明していた。これに対してロベール・シューマンは「悲痛な驚き」を表明し、アルザスでは数カ月にわたって、反政府集会やデモが行われた。一九二四年七月に、UPRはストラスブールで反教権政府への抗議集会を開き、一万七〇〇〇人を動員していた。ロベール・シューマンやルイ・マランの姿もそこにあった。住民投票が要求され、九四五の市町村の内の六七五の市町村議会で反対決議が挙げられた。下院のアルザス・ロレーヌ問題検討委員会で、一人のアルザス・ロレーヌ選出議員は政府案に反対して抗議の辞任をした。ストラスブール大司教は、フラ

ンスとキリスト教文明は新たな野蛮によって危殆に瀕したと声明し、教会を迫害する者に対して毎日祈るように命じた。⁽⁷⁰⁾

コンセイユ・デタはエリオ案を憲法違反と宣言し、エリオは断念に追い込まれたが⁽⁷¹⁾、エリオの同化政策が触媒となつて、アルザスの自治運動に結集軸を提供することになる。一九二五年五月に、自治と自由とドイツ語の擁護を掲げる週刊『未来』が創刊された。翌春には三万部の発行部数と二万八〇〇〇人の定期購読者を数えた。当時のアルザスの世帯数は約三五万であつたので、一二世帯に一軒の割合で読まれたことになる。また一九二六年二月に、教権的自治派ロッセと共産党議員ムレールとの間でアルザスの権利擁護に関する統一戦線協定が調印され、赤旗と十字架の同盟が生まれていた。この同盟は一九二八年選挙で効果を表すであろう。一九二六年三月にも共産党議員のユベールは、「アルザス・ロレーヌの勤労大衆は自由な自己決定の権利を決して放棄しなかつた」と語っている。かくして一九二六年六月八日に、行政的自治を要求する「エルザス・ロートリンゲン郷土同盟(Elsass-Lothringen Heimatbund)」が創設された。この運動体は、アルザスの民族と言語と伝統を踏みにじる同化政策を糾弾し、「少数民族としてフランスの枠内での完全な自治」を要求していた。この宣言は、教権派から反教権派まで、民主派から共産党まで含む多様な自治主義者の要求の最大公約数であつた。この宣言を注釈した『未来』の言葉(「われわれは下僕になりたくない。われわれは自分の国で主人となるために生まれてきたのだ」)にあるように、フランスから二流市民扱いされてきたアルザス人の憤懣がそこには表明されていた。しかし政教分離を原則的に支持する進歩党や共産党との同盟を説く『未来』は、カトリックの世界に論争をもたらし、UPRと郷土同盟の分裂につながつた。郷土同盟の誕生はUPRの自治派と国民派との間に内紛を惹起し、七月に自治派ロッセの解任と八月のコルマールでの乱闘騒ぎへと発展し、さらにUPR自治派が共産党との関係を強めたために、一九二八年一月にUPRは分裂するにいたる。アルザス国民的民衆

行動団 (APNA) を名のつた UPR 国民派は、自治を掲げはするが「フランスに奉仕することを望む国民政党」と、その旗幟を鮮明にした。⁽⁷²⁾

郷土同盟の宣言が出された日に、後のナチ占領下でストラスブール市長となるロベルト・エルンストは、チュウリッヒでアルザスの三つの著名な反仏新聞に資金援助するために自治派代表と会っていた。基金はドイツの産業界から出ていた。一九二四年夏から、カトリック自治派も、在外ドイツ人カトリック連盟の書記であるエミール・シュレール師とバーゼル近郊で会い、資金を得ていた。ドイツ外務省からも秘密資金が流れ、一九二五年から二九年にアルザスの自治運動に一〇〇万マルク以上が注ぎ込まれた。シュトレーゼマン外相は、ロカルノ条約で仏独国境はヴェルサイユ条約で決められたとおりだと述べたにもかかわらずである。

パリの中央政府は自治運動の叢生にドイツの関与を疑った。⁽⁷³⁾ 自治派の三新聞、『真理』(一九二七年五月創刊)、『未来』、『民族の声』(一九二六年創刊)が一九二七年一月に発禁処分を受け、一二月には、ロッセをはじめ著名な自治派二四名ほどが逮捕された。彼らは、フランスの転覆を企てるために資金を集め、植民地保護隊 (Schutztruppe) の組織化を計画していたと言われた。次第にフランス色を強めた UPR は、自治主義者の陰謀に対する政府の戦いを支持するにいたる。パリ政府は、一九二八年四月三〇日からコルマルで二人の指導者を国家反逆罪で裁判にかけた。実際にはこれら被告は、フランスの枠内での自治を望む者とドイツへの編入を望む者の二グループに割れていた。しかし告発の根拠は薄弱であり、ドイツの関与については噂しかなかった。被告もドイツとの関係を否認し、フランスの法的枠内での文化的自治運動だと主張した。五人に有罪が宣告され、うち二人は投獄中に下院議員に再選された。フランス議会在選挙の無効を宣言したので(四一六の棄権票)、他の二人の自治派がその代わりに選ばれた。この一九二八年選挙では、同化政策を主張した急進党と社会党は三分の一近く得票を減らし、自治派や自治派の支援を得た候

補が当選した。アルザス共産党は進歩党との関係を密にし、進歩党のダーレは綱領にソ連への軍事介入反対を掲げたほどである。

自治派は一九二九年の市議会選挙でも、ミュルーズを除く都市部で票を伸ばした。コルマールでは一七名のUPR、四名の自治派、九名の共産党議員が誕生したし、ストラスブールでは四名のUPR、七名の自治主義派、一名の共産党員が当選していた。自治派と共産党の協力がさらに強まった。この時、共産党員のユベールがストラスブール市長となり、コルマール裁判でロッセを擁護したUPR自治派のミシェル・ワルターが助役となったが、フランス共産党は「反動」との連合を受け入れることができず、赤旗と十字架の同盟を推進したムレル議員を除名している。共産党にあっても、アルザスの自治派共産党とパリの党中央との軋轢は高まり、自治派共産党は労農党を今後結成することになる。一九三二年の下院選挙では、民主派と社共は後退したが、UPRは九議席を獲得し、自治派も現状を維持した。同化を求めるフランス政府の対応は、「フランス政府はドイツ語のアルザス・ロレーヌに対して、非民主的で独裁的で帝国主義的態度をとった」(『エルツ(Els)』一九三三年三月一日)という自治派の反発につながったが、それでもヒトラーの登場は、カトリック教徒のフランスへの愛着を強め、自治派の再編をもたらすことになる。⁽⁷⁴⁾

ブルム人民戦線政府を成立させた一九三六年選挙は、アルザスでも左翼の復調と右翼の後退を告げたが、選挙の勝者はUPRで九名が当選していた。オー・ラン県では人民戦線派の候補は全滅し、オー・ラン県ほど工業化されていないバ・ラン県で、共産党一名、自治派共産党二名、進歩党一名が当選していた。アルザス選出の議員一六名中の二名が反人民戦線派であり、自治派共産党と進歩党議員の人民戦線への忠誠も疑わしかった。事実、UPRと自治派共産党と進歩党議員一二名からなるアルザス出身議員は、下院で民衆行動派という独自の院内会派を作って共同歩調をとった。下院で郷土戦線(Heimatfront)が再現し、政府の同化政策を監視した。母語(Muttersprache)や宗教的伝統

の擁護、行政的地方分権は、依然としてアルザスのキーワードであった。⁽⁷⁵⁾

ブルム内閣が中等教育の義務教育年限を一年延長する法律を可決したが、「国語のより深い知識」をアルザスとロレーヌの子どもたちに保証するために、東部地域のみ教育年限を二年延長するデクレを一九三六年一〇月に出したことが、争いの火種となった。現行の二言語主義と宗教教育を否定しかねないこのデクレに、反対の声が挙げられ、その撤回が要求された。アルザス自治派にとって、二言語主義と宗教教育こそがアルザスの個性であったからである。政府はデクレの実施を延期せざるをえなかった。一九三七年一二月にコンセイユ・デタがこのデクレを無効としたので、アルザスの憤激も鎮静化した。⁽⁷⁶⁾人民戦線政府といえども、アルザスとフランスとの間の心理的障壁を打ち破ることができなかったのである。

しかし自治派も一枚岩ではなかった。ナチズムには敵対的でただアルザスの独自性の尊重を謳う地域主義的なカトリックの自治主義と、反仏的で反共和的でナチス・ドイツと結びつくユベールやシャルルのアルザス北部の分離主義的自治主義とは、区別されねばならない。北部地域には、余剰農産物をドイツに売りたい農民やマジノ線建造のために土地を収用された農民の不満があった。ともあれ、自治運動はパリの脅威に対してのみ同盟しえたのである。というのも自治主義者たちは最終目的を異にしており、統一戦線はくめなかったからである。多くのアルザス人は分離主義者ではなくて地域主義者であった。パリの無理解によって自治主義者に押し出されたのである。アルザス人の不平に理解を示した唯一の集団はアクション・フランセーズであった。アルザスに限られた自治を認める王党派の提案は、当時の状況下では適切であり实际的であった。しかし一九三〇年代の仏独関係は、アルザス問題の双務的解決を困難にした。一九三九年九月の第二次大戦の勃発でアルザスの自治派がフランス政府に逮捕され、交渉のチャンスは失われた。

3 ナチスによる同質化⁽⁷⁾

ヒトラー政権の誕生とヒトラーによるコンコルダートの調印によって、アルザス自治派のなかの親独勢力が力を増していた。少数とはいえ、一九三三年三月に『民族の声』の系譜につらなる自治派新聞『エルツ』は、第三帝国が民主的基盤を持っていると指摘していたし、同時期のルター派の新聞も帝国議会や邦議会選挙でのナチス「国民政党的決定的勝利」に注目し、「民衆の子（ヒトラー……筆者）は、第三帝国の新しいドイツに関する彼の理想のために大衆の熱狂をかきたてた」と評していた。ヒトラーは反教権政策を進めるいっぽうで、一九三三年七月にコンコルダートに調印し、カトリックに揺さぶりをかけてきた。同時期のフランスでは、アルザスに宗教教育の免除を要求する通達が出され、カトリックへの攻撃が続いていた。だから、『エルザス通信(Elsässer Kurier)』のようにコンコルダートの調印を評価して、「キリスト教は国家によって保障された。……カトリックの活動は国家の保護下に置かれた」と過度の賞賛を送った新聞すらあった。逆にドイツの宗教的迫害を非難するカトリックの新聞『エルザス人』は、ドイツでの販売を禁止された。ただ政治的経済的危機が深まるフランスと対照的に、ヒトラー・ドイツは失業の減少と生産向上という経済回復の点でアルザス人に魅力を与えた。カトリック紙のなかには、ヒトラーがヨーロッパの平和を打ち固めたと讃えるものすら出てきた(『エルザス人』)。それでも、一九三四年にあいついだオーストリア首相の暗殺やナチ左派の粛清といった血なまぐさい事件は、アルザス人に警戒心を生んでいた⁽⁷⁸⁾。このように自治派の分極化とドイツに対するアンビバレントな感情のなかで、アルザスは第二次大戦を迎えるのである。

ドイツ軍は、一九四〇年六月一七日にコルマール、一八日にミュルーズ、一九日にストラスブールに入城した。六月二二日の休戦協定には、アルザスについての言及はなかった。フランス政府によって捕らえられていたアルザスの

自治派は、ドイツ軍によって解放され、ゲルマン化の尖兵と化す。ヒトラーはアルザスを一〇年でゲルマン化することを決めていた。大管区長官ロベルト・ワーグナーは、フランス南西部に逃走したアルザス人の帰還奨励や内地フランス出身の知事や官吏の追放を行って、自治を望むアルザス人の期待に応えようとしたかのものであったが、アルザスの個性を認めることはなかった。

UPRのリーダーのジョゼフ・ロッセ、ジョゼフ・ケツピ、マルセル・シュテュルメルは、一九四〇年六月に、エルンストの圧力で三穂宣言に署名し、ナチ第三帝国への統合を要求した。おそらく彼らは勝利したドイツのなかで教会の自由やアルザスの独自性が保てると期待したのであろう。一九三三年七月にヒトラーは、コンコルダートに調印したのではないか。しかしそれは幻影に終わった。ヒトラーはアルザスをヴェストマルク大管区に併合し、アルザスの地域主義をゲルマン化の道を妨げる障害と見なした。教権的自治派に対するナチの不信を感じたUPRのロッセは、ドイツとフランスの間でアルザスを緩衝国家として独立させることを夢みた。同派内にはドイツの抵抗運動家やルーズヴェルトと接触を取ろうとした者もいた。⁽⁷⁹⁾

アルザス問題の「最終的解決」が始まる。それはアルザスのゲルマン化と脱フランス化であった。ヒトラーは『わが闘争』のなかで、「二民族一国家」を唱えていた。フランス風の町や通りの名をドイツ風に改めさせたり、改姓を求めた。同化できないアルザス人が追放されたり、フランスを想起させる記念碑が爆破されたり、徴兵制が導入されたりした。⁽⁸⁰⁾ もっとも、アルザスのフランス語系地域の住民はフランス語を話すことを許されていたが、つねに公認カードを携帯する必要があった。それでも戦争末期には、この権利も制限を受けた。⁽⁸¹⁾ そのうちアルザス語方言ではなくて、標準ドイツ語を話すよう勧告された。

一九四四年十一月一九日からアルザス解放の戦いが始まった。十一月二三日にストラスブール、十一月二八日にミ

ユルーズが解放されたが、一月一八日にドイツ軍のアルデンヌ反攻があつて、一時後退を強いられた。しかし年が明けた一月四日にフランス軍がふたたびストラスブルに現れ、二月二日にコルマールが解放され、三月二日までアルザス全土が解放された。⁽⁸²⁾

アルザスは、戦間期には共和フランスから、第二次大戦中はナチス・ドイツから同質化の政策を被つたが、同化の試みはともに失敗に帰した。しかしナチの占領体験で、アルザス人は第三共和政下の政治的自由の貴重さを知った。一九四三年七月にアルザスで流行したジョークにそれは示されている。そのジョークは、「フランス人は、われわれアルザス人をフランス人にすることに二〇年かかっても成功しなかったが、ドイツ人はそれを実現させつつある」と皮肉つたのである。⁽⁸³⁾

併合による犠牲が大きかっただけに、対独協力に走つたカトリックとアルザス共産党の自主主義は戦後に力をなくした。フランス共和国臨時政府も、ストラスブルに著名なカトリックのブロンデルを共和国委員に任命すると同時に、知事にはアルザス出身のプロテストントをあてて、共和国委員を補佐させるという賢明な方策をとり、アルザス地域の特性に配慮を示した。また大学区長には元ストラスブル大学法学部教授のプレロが任命された。苦い経験となつた対独協力的な自主主義に特化しない、新たなアイデンティティーが求められた。それは、アルザスの個性に閉じこもる閉じたアイデンティティーではなくて、個性を自覚しつつも外に開かれたアイデンティティーであるだろう。

四 コンセンサスの創出

1 懲罰から和解へ

娘アルザスは、母フランスのもとへ帰ってきた。もはや未成年ではないので、娘はきたるべき日々の共同生活の形について語った。娘は四年間の苦しみや試練や自分の弱さについても話した。母は裁き手ではなかった。⁽⁸⁴⁾このような期待もむなしく、戦後のアルザスは一種の懲罰を受けた。解放後、四万五〇〇〇人のアルザス人が対独協力容疑で収容され、その多くは一九四五年の秋まで釈放されなかった。この措置に、「ドイツ語を喋るフランス人」への不信がなかったと言いつつ切れようか。第二次大戦でアルザスは、住民の三・五パーセントに当たる三万五〇〇〇人以上の死者を出したが、他の諸県は住民の一・五パーセントの死者を出したにすぎなかった。このように犠牲者が多かったにもかかわらず、ドイツ的アルザスは一種の制裁を受けたのである。⁽⁸⁵⁾

アルザス人の不満は、オラドゥール村裁判で爆発した。オラドゥール村事件とは、一九四四年六月にナチ武装親衛隊に村民が虐殺された事件である。⁽⁸⁶⁾その実行犯のなかに、アルザスで強制徴募された一三名のアルザス兵が加わっていたのである。つまり被害者と加害者がともにフランス人という、戦争の複雑な実態がさらけ出された裁判であった。一九五三年一月にボルドーで開かれた裁判で、禁固五年から強制労働八年の刑を宣告されたが、有罪とされたアルザス人に事実誤認があった。

このニュースはアルザス全土に驚きやら憤りを惹起し、半旗が掲げられ、半鐘がならされ、戦死者の記念碑が喪章

でおおわれ、勲章が送り返されたり、予備将校が辞任したり、市議会が抗議声明を発したりした。アルザスは、内地フランスの無理解に反発したのである。フランス的な愛国者のアルザス人が、この裁判にもっとも反発した。二月一六日に、ドゴールは「アルザスを憤らせた苦悩を解しないフランス人がいるだろうか。ヴィシーの降伏によって敵に無惨に併合され、多くの若人がドイツ軍に強制編入されるという恐るべき試練を被ったアルザスの感情は、今、判決文がアルザスに屈辱的と思われる裁判の評決を拒絶している」と態度を明らかにした。四日後に、ルネ・プレヴアン首相の示唆で議会は大赦を可決した。賛成三一八票、反対二一一票、棄権八三票であった。アルザスはこの決定を歓迎した⁽⁸⁷⁾。

この裁判がアルザスとフランスとの和解の一つの節目となった。一九五七年から五八年にかけて、時の政府は「宗教と学校に関してアルザスとモーゼル地方の特別な地位」を確認した。それでも、アルザスの個性のひとつである言語の復権は徐々にしか進まなかった。戦後の一九四五年から一九五三年まで、アルザスの小学校ではドイツ語が教えられていなかった。標準ドイツ語だけではなく、アルザス語の使用が学校や公的場所で禁じられ、私生活の場だけで使われる状況が生じた。フランス語の国語化をめざす国語教育は、「もっとも重要な国民創出の政策」であったからである⁽⁸⁸⁾。またアルザスの歴史も教えられなかった。一九五一年のディクソンヌ法は一部の地域語を学校で教えることを認めたが、アルザス語は対象からはずされていた⁽⁸⁹⁾。小学校でのドイツ語教育の問題は、一九五二年に取り組み、一九六一年からドイツ語は上級学年の三年間に教えられるようになった⁽⁹⁰⁾。

それでも、このような状態に危機感を抱いたアルザス人が、一九六〇年代からルネ・シッケレ協会やミューズの演劇集団「アルザス座」などをおして言語や文化の復権要求を展開した。その結果、一九七二年に学校教育のなかで週二・五時間の教育が認められた。ルネ・シッケレ協会はバイリンガルを掲げているが、アルザス人は学校でドイ

ツ語を学んでいるという意識が強く、「有用性」という観点からドイツ語教育を肯定的に捉えている。ここにも言語が、「帰属への権利」と「選択への権利」の両者とかかわることが示されている。なお、「相違への権利」を掲げたミッテラン政権の「ドイツ通達」(一九八二年六月)によって、ドイツ語教育が認められ、アルザス語教育の復権がなされたと言つてよい。⁽⁹¹⁾ それでも、これまでのフランス語化政策によってアルザス語使用者は今日では半減したのである。

2 新たなコンセンサス

他方で戦後のフランスは、再編入されたアルザス地域の統合問題に配慮を示した。露骨な同化政策ではなくて、コンセンサスの創出をめざすべく努めたのである。第四共和政期のアルザスで影響力を持った政治勢力は、人民共和運動(MRP)とドゴール派であった。一九四六年にMRPは一五議席の内の八議席を獲得したし、一九五六年には一二議席を得た。一九四七年に結成されたドゴール派のフランス国民連合(RPF)は、一九五一年には、バ・ラン県で三割以上、オー・ラン県で四割近い票を獲得していた。⁽⁹²⁾

UPRの流れを引くMRPは、アルザスのパリに対する特殊性を、とりわけ宗教面でのアルザスの「特別地位」を擁護した。MRPの代表のロベール・シューマンは、一九一四年以前のモーゼル地方のカトリック運動の希望の星の一人であり、第四共和政下でも主要な役割を演じた政治家だし、同じくバ・ラン県選出のMRP代議士ピエール・フリムランは、一九四八年から大臣を歴任した政治家である。欧州経済共同体(EEC)や欧州防衛共同体(EDC)を政策として掲げたMRPの欧州主義は、アルザス人の琴線に触れるものであっただろう。第四共和政下のアルザスではMRPが第一党であった。こうして戦後のアルザスは、カトリックの伝統をとおして容易に全国レベルの政治に参入することができたのである。

またドゴール主義も強力な統合の役割を演じた。ドゴールがアルザスを一二回も訪問したのも、統合への努力の印であった。自由フランスの将軍たちは、アルザス解放後すぐに、フランス革命とナポレオン期に活躍したアルザス出身のクレベール将軍やラップ将軍と同じく、アルザスの偉人の仲間入りをした。ドゴールやルクレールやド・ラットルの肖像はアルザスの商店や家庭に飾られた。さらに一九四七年四月七日のアルザス完全解放二周年の日に、ドゴールはストラスブール市庁舎のバルコニーからRPFの創設を宣言した⁽⁹³⁾が、政党の旗揚げの地にアルザスを選んだことは、権威と民主主義を同時に求めるアルザス人から支持された。戦間期の民主派はRPFに結集⁽⁹⁴⁾し、アルザスは、ゴースムをとおしてもフランスに着地していくのである。第五共和政下のアルザスは、しばしドゴール派の牙城となるであろう。

このように、一九六〇年から七〇年代初めがアルザスの戦後期の終了であった。二言語主義は公認され、もうひとつのアルザスの個性であった宗教的情熱は、アルザスでも弱まった。ストラスブール市長のピエール・フリムランが一九七〇年九月のヨーロッパ見本市の開会式で、「国家事務の地方分散は地方分権化の第一段階たるべきだ」と語っていたように⁽⁹⁵⁾、地域分権化の動きが始まる。しかしアルザスの地域主義運動は、バスクやコルシカ、オクシタニーと異なり過激化しなかった。フランスで民族問題が政治問題として前面に登場するのは一九六八年以降のことであるが、この時期は、EECが欧州共同体(EEC)として発展をとげ、仏独蜜月とかパリ・ボン枢軸と呼ばれる仏独関係の始まりの時期であった。このような欧州統合の恩恵を受け、豊かな「北」に属するアルザスにとって、戦前の自治主義に傾斜する必然性はなくなったのである。なぜなら、ECから欧州連合(EU)へとという欧州統合の進展とともに、アルザスはフランスの周辺からヨーロッパの中心へと地理的・空間的に移動したからである。

かくして現在のアルザスは経済的先進地域となった。外国系企業が多く、六割はドイツ企業である。越境通勤者

(Frontaliers)は、一九九一年で有業人口の七・三パーセントにたつした。それは、この地域の失業率の低さとなって表れている。アルザスにとっての「相対的剝奪」⁽⁹⁶⁾は、今や内地フランスとの関係から生じているのではなくて、ドイツやスイスの経済発展との落差によるところが大きい。アルザスには、ドイツとスイスに依存した経済構造が存在しているからである。⁽⁹⁷⁾とまれ、ライン河をまたいだトランスナショナルな地域が出現したのである。

むすび

アルザスの歴史の根底にあるのは、文化的二重性である。仏独のはざまでスタンスを決めねばならなかったアルザス人にとって、二重性は豊かさの源泉にもなれば耐えがたい苦悩の源にもなった。アルザスの文化的二重性は、アルザス人に国家や国民の相対視を可能にしたり、引き裂かれた忠誠心がアルザス人を無気力へと追いやりたりもした。アルザスの住民は国籍が幾度も変わった経験から、国家や政治に無関心な者も多かった。彼らの関心は、「土地と財産およびどちらの主人の税金がより少ないのか」ということにあった。第二次大戦のとき、戦争に勝つまでに五つも軍服を着替えたアルザス人もいた。一九三九年にはフランス兵として動員され、一九四二年にはドイツ兵として強制徴募され、ソ連で捕虜になりタンボフ収容所からの解放時に赤軍の制服を着、ついでアルジェリアに向かう途中でイギリス軍の軍服を着、最後にフランス軍の制服を着たというアルザス人もいたのである。⁽⁹⁸⁾日見主義ないし事大主義的な態度が生まれるのも無理はない。アルザスの初等教師のフィリップ・ユセルは、第一次大戦が終了したとき、商人から新聞記者や教師にいたるミューズ市民が態度を豹変させるすばやさに、驚きを表明していた。それまではドイツの功労十字勲章(Verdienstkreuz)を飾りたてていた人すら、三色の飾りリボンを身につけたからである。⁽⁹⁹⁾

王党派のシャルル・モーラスやジャック・バンヴィルは、フィリップ・オーギュストからルイ一四世までのフランス君主制は、統一ドイツの誕生を阻止すること以外の目的を持たなかったと主張したが、統一されたドイツにフランスが直面したのは、第三共和政期と一九九〇年代の第五共和政である。第三共和政のフランスはドイツに苦杯を嘗めさせられたが、今日の仏独関係は、一九六三年の仏独条約以降の絆がとくにドゴール亡き後の一九七〇年代に深まり、アルザス問題の布置状況もおのずと変化したのである。

フランスは中央集権が強い国と考えられているが、それでも一九八二年のミッテラン政権の地方分権法や多文化主義の容認によって少しずつ様変わりしつつある。「相違への権利」が主張され、複数文化が容認されてきている。対外的にも、ミッテランのドイツ政策には、統一ドイツをEUの枠内にとどめおいてコントロールするというドゴール的なリアリズムも見え隠れしたが、ドイツとの協調を重視する欧州志向がアルザスにとって追い風となった。一九九二年のマーストリヒト条約批准を問う国民投票で、アルザスの賛成票が七割を占めたことは、アルザス人の関心のありかを示している。それには、欧州議会や欧州人権裁判所などの機関がストラスブールに置かれていることと無縁ではあるまい。

チャーチルが述べた「ヨーロッパの首都ストラスブール」という言葉は現実と化し、アルザスは「ヨーロッパの交差点」となった。一九四五年一〇月五日に臨時政府首班のドゴールも、ライン河が「西洋の絆にふたたびなった」とストラスブールで述べていた⁽¹⁰⁰⁾。ストラスブールは、ふたたびその名にふさわしい諸文明が交わる「街道が集まる町」(une ville des routes)⁽¹⁰¹⁾となったのである。今日のアルザスは共通のヨーロッパの枠組みのなかで、二つの文化の結び目ないし橋として現れた。多文化主義に向かう今日の社会のなかで、マルザスが求めているものは文化的アイデンティティの承認である。アルザスは、文化的自律性を保ちつつ、ナショナルという枠を越えたトランスナショナルな地域

主義を生きている。

かくしてフランスとドイツの二重の文化を刻印されたバイリンガルのアルザス人は、欧州人としての新たなアイデンティティを手にしつつある。欧州人への道こそが、アルザスの地域主義の生き残りの戦略となるであろう。それは、ドイツ人でもフランス人でもアルザス人でならない道かもしれない。アルザス問題が提示したものは、近代国民国家からの相対的解放をEUへのコミットメントに求める運動であった。今やアルザスは、世界市民主義的な、地球市民的な地平をめざすときであろう。同化なき共生という壮大な実験をアルザスが始めるとき、過去の歴史は止揚され、地球倫理(Global Ethics)という二一世紀に向けた新たな理念が生まれることだろう。

(1) ヘルムート・プレスナー『遅れてきた国民』土屋洋二訳、名古屋大学出版会、一九九一年、三九、一一二、一四一ページ。なお、ユルゲン・コッカも「一八七一年のドイツ帝国は、しばしば未完の国民国家として特徴づけられてきた」と語っているし(ユルゲン・コッカ『歴史と啓蒙』肥前栄一・杉原達訳、未来社、一九九四年、一一九ページ)、ハーバーマスもドイツをフランスとの対比で「遅れてきた国民」と位置づけている(チャールズ・テイラー、ユルゲン・ハーバーマス、その他『マルチカルチュラリズム』佐々木毅その他訳、岩波書店、一九九六年、一七〇ページ)。

(2) 仲井斌「ドイツ史の終焉」『思想』八六三号、一九九六年、六七ページ。

(3) ゲーテ『ファウスト(一)』高橋義孝訳、新潮文庫、一九八八年版、二三ページ。

(4) ジョルジュ・ルフェーヴル『一七八九年—フランス革命序論』高橋幸八郎・柴田三千雄・遅塚忠躬訳、岩波書店、一九七五年、一九五ページ。

(5) 以上、ミシュレ『学生よ』大野一道訳、藤原書店、一九九五年、一四、二七ページ。桜井哲夫『「近代」の意味』NHKブックス、一九八四年、四三ページ。ミッテラン、ウィーゼル『ある回想 大統領の深淵』平野新介訳、朝日新聞出版社、一九九五年、九三—九四ページ。

(6) ミシュレ『民衆』大野一道訳、みすず書房、一九七七年、三三ページ。

- (7) 『世界の名著 37 ミシュレ』桑原武夫編、中央公論社、一九六八年、一三一～一四二ページ。立川孝一『フランス革命』中公新書、一九八九年、三一～六九ページ。なお連盟祭の五つの意義については、西川長夫「国民(Nation)再考」『人文学報』第七〇号、一九九二年、一〇～一一ページ。
- (8) ウージェーヌ・フリリップス『アルザスの言語戦争』宇京頼三訳、白水社、一九九四年、四二、四五ページ。河野健二編『資料フランス革命』岩波書店、一九八九年、四八一～四九五ページ。なお革命初期には、イギリス人のトーマス・ペインやドイツ人のアナカルシス・クローツに、フランス市民権を認めて国民公開の議員に選出するほどコスモポリタンであったフランスも、ナショナリズムが頭をもたげ出したジャコバン独裁期には、外国人から市民権を剝奪したが、不寛容が強まったことの証である(西川長夫「フランス革命と国民統合」『思想』七八九号、一九九〇年、一二五～一二六ページ)。
- (9) 糟谷啓介「言語・境界・領土」『現代思想』第二〇巻九号、一九九二年、一九九ページ。「言語イデオロギー」としての「国語」については、イ・ヨンスク『「国語」という思想』岩波書店、一九九六年を参照。
- (10) ルソー「コルシカ憲法草案」遅塚忠躬訳、『ルソー全集』第五巻所収、白水社、一九七九年、三〇一ページ。
- (11) コッカ、前掲書、一二五ページ。
- (12) メルカトル図法に象徴されるように、近代の曙光を告げる一六世紀のオランダに地図作成技法が発達したことは、地理上の発見が地図を必要としたという理由だけではなくて、ヨーロッパにおいても国境の線引きを必要とする領域国家が誕生したことに無縁ではない。なお同様の問題意識からブルターニュを論じた文献に、中木康夫「フランス政治史と周辺問題」『法政論集』第一一〇号、一九八六年、がある。わが国で「国民」の語が一般的に用いられたのは、明治四年(一八七二)の戸籍法を制定した太政官布告であったという(山内昌之「ネーションとは何か」『岩波講座現代社会学』24 民族・国家・エスニシティ』一九九六年、一一ページ)。
- (13) Charles De Gaulle, *Discours et Messages III, Le Club Français des Bibliophiles*, 1972, p. 375; Jacques Granier, *De Gaulle et l'Alsace*, Strasbourg, 1970, p. 288.
- (14) ジャック・ブズー『フランス―風土と生活』柏岡珠子訳、三修社、一九八二年、一七四～一八四ページ。
- (15) Allan Mitchell, *Victors and Vanquished*, Chapel Hill, 1984, p. 176; Jean-Marie Mayeur, *Une mémoire-frontière: l'Alsace*, in Pierre Nora dir., *Les lieux de mémoire, II Nation*, t. 2, Paris, 1986, p. 76. デュルケーム家が、アルザスのアグノーでラビをしていたことは有名である。夏刈康男『社会学者の誕生』恒星社厚生閣、一九九六年、二二ページ。

- (16) Alfred Wahl et Jean-Claude Richez, *La vie quotidienne en Alsace entre France et Allemagne 1850-1950*, Paris, 1993, p. 240, p. 244.
- (17) Pierre Pfimlin et René Urich, *L'Alsace, destin et volonté*, Paris, 1963, p. 25. 共著者のフリムランは、第四共和政で首相や大臣を務めたアルザス人である。
- (18) Philippe Dollinger dir., *Documents de l'histoire de l'Alsace*, Toulouse, 1972, pp. 332-333, 336, 361. *以下* Dollinger, *Documents* *を略*。
- (19) 吉田進『ラ・マルセイエーズ物語』中央公論社、一九九四年、参照。
- (20) Wahl et Richez, *op. cit.*, p. 225. フォリックス、前掲書、六三〜六八ページ。
- (21) 梶田孝道「エスニシティと地域運動」『思想』七三七号、一九八五年、五八〜五九ページ。
- (22) Dollinger, *Documents*, pp. 402-405.
- (23) Mayeur, *op. cit.*, p. 88.
- (24) Jacques Binoche, *Histoire des relations franco-allemandes de 1789 à nos jours*, Paris, 1996, p. 48.
- (25) *以上* Paul Smith, *À la recherche d'une identité nationale en Alsace 1870-1918, Vingtième Siècle*, no. 50, 1996, pp. 30-31; Philippe Dollinger dir., *Histoire de l'Alsace*, Toulouse, 1970, p. 433. *以下* Dollinger, *Histoire* *を略*。
- (26) 田中克彦『ことばと国家』岩波新書、一九八一年、第四〜五章。田中正人『二人の子供のフランス巡歴』とその時代」谷川稔その他『規範としての文化』平凡社、一九九〇年、一二三〜一六〇ページ。七月一日が国民の祝日になったのは一八八一年であり、ジャンヌ・ダルク崇拜のピークが一八八四年であったことも、ナショナリズムの高揚を示している (Gerd Krumeich, *The Military and Society in France and Germany between 1870 and 1914*, in Klaus-Jürgen Müller ed., *The Military in Politics and Society in France and Germany in the Twentieth Century*, Oxford, 1995, p. 29.)°
- (27) Wahl et Richez, *op. cit.*, pp. 228-229.
- (28) Georges Hacquard, *Histoire d'une institution française : L'École alsacienne*, Paris, 1982. シュール・フェリー夫人はアルザス人であった。このためフェリーは政敵から「プロイセン人と結婚している「ヒスマルクの従者」だと非難された (Mitchell, *op. cit.*, p. 316.)°

- (29) Raoul Girardet, *La société militaire dans la France contemporaine 1815-1913*, Paris, 1959, p. 174, p. 193.
- (30) Pfimlin et Uhrich, *op. cit.*, p. 29. 南充彦「モリス・バレスのナショナリズム思想」、京都大学政治思想史研究会編『現代民主主義と歴史意識』ミネルヴァ書房、一九九一年、一九〇～一九一ページ。
- (31) 木下半治『ジャン・ジョレス』誠文堂新光社、一九六三年、一五六ページ。
- (32) Wahl et Richez, *op. cit.*, p. 232.
- (33) Dollinger, *Documents*, pp. 435-437. それでもこの時期、アルザス語の劇場が誕生したり、一八九九年には『挿絵入りアルザス雑誌』が創刊され、一九〇七年にはストラスブールにアルザス美術館が作られたりして、アルザス語の覚醒が見られた。
- (34) Dollinger, *Histoire*, p. 444.
- (35) Smith, *op. cit.*, p. 27.
- (36) 大石真「フランス公法と特例制度」『法学論叢』第一三八巻第四・五・六号、一九九六年、二二二～二四ページ。
- (37) 以上 Dollinger, *Documents*, p. 441. フィリップス、前掲書、九九～一〇六ページ。
- (38) Smith, *op. cit.*, p. 23.
- (39) Dollinger, *Histoire*, p. 446.
- (40) John E. Craig, *Scholarship and Nation Building, The University of Strasbourg and Alsatian Society, 1870-1939*, Chicago, 1984, p. 138; Dollinger, *Histoire*, pp. 450-452; Smith, *op. cit.*, pp. 28-29.
- (41) 以上「フィリップス」前掲書、二七五～二七六ページ。Craig, *op. cit.*, p. 167; Dollinger, *Histoire*, pp. 453-455.
- (42) Wahl et Richez, *op. cit.*, p. 247. フレデリック・オッフェ『アルザス文化論』宇京頼三訳、みすず書房、一九八七年、二四～二八ページ。
- (43) 以上 Dollinger, *Histoire*, p. 462.
- (44) *Ibid.*, pp. 464-466.
- (45) 以上 François Dreyfus, *La vie politique en Alsace 1919-1936*, Paris, 1969, p. 32, p. 34; Dollinger, *Histoire*, pp. 466-467.
- (46) 若林幹夫『地図の想像力』講談社、一九九五年、一九〇ページ。
- (47) Ferdinand Lot, *Qu'est-ce qu'une nation?*, 1949, in *Recueil des travaux historiques de Ferdinand Lot*, t. 1, Genève, 1968, p.

261. なおロットは、ロシアの音楽家ボロディンの孫娘と結婚し、ロットの長女の夫はロシアの人類学者ボリス・ヴィルデである。ヴィルデはナチ占領下の最初のレジスタンスである人類博物館事件で逮捕され、一九四二年二月に銃殺された(Christophe Charle, *Les professeurs de la faculté des lettres de Paris 1909-1939*, t. 2, Paris, 1986, p. 141.)°
- (48) Fustel de Coulanges, *Questions contemporaines*, 12^e éd., Paris, 1917, pp. 89-102.
- (49) フリップス、前掲書、八七ページ。Dollinger, *Histoire*, p. 460.
- (50) Ernest Renan, *La réforme intellectuelle et morale*, Paris, 11^e éd., 1923, © 1871, p. IV.
- (51) *Ibid.*, pp. 180-181, 189, 202.
- (52) Ernest Renan, *Qu'est-ce qu'une nation?*, Paris, 1996, pp. 233, 240-241. 鶴飼哲訳「国民とは何か?」『批評空間』第九号、一九九三年、四三、四七ページ。なおルナンは、一八八七年五月八日にも五年前の「国民とは何か」の講演をいわば「信仰告白」だと述べて重視している(*Ibid.*, p. 244.)°
- (53) Ernest Lavisse, *Vue générale de l'histoire politique de l'Europe*, Paris, 1890, 17^e éd., 1927, pp. 204-205, 216-217.
- (54) Lot, *op. cit.*, pp. 256-257.
- (55) Rogers Brubaker, *Citizenship and Nationhood in France and Germany*, Harvard U. P., 1992, p. 95.
- (56) この見地からすると、帰化手続きの厳格化を行ったヴィシー期には、血統主義への回帰があったといえることができる。
- (57) ウォルター・リップマン『世論』上(掛川トミ子訳)岩波文庫、一九八七年、一九六ページ。
- (58) 言語は「想像の共同体を生み出し、かくして特定の連帯を構築する」からである(ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』白石隆・白石ちや訳、リプロポート、一九八七年、二一九ページ)。現代のナシオン概念をめぐる議論については、Dominique Schnapper, *La France de l'intégration*, Paris, 1991, が参考になる。なお本書については、愛媛大学の岡村茂教授より教示を得た。
- (59) Ernest Renan, *Qu'est-ce qu'une nation?*, p. 241. 邦訳、四八ページ。
- (60) Dreyfus, *op. cit.*, pp. 51-52, 55.
- (61) フリップス、前掲書、一三二―一三三、二八四ページ。Dollinger, *Histoire*, pp. 471-472; Dreyfus, *op. cit.*, p. 56, p. 67.
- (62) Wahl et Richez, *op. cit.*, pp. 117-119.
- (63) Craig, *op. cit.*, pp. 210-211. 一九一九年のストラスブル大学の学生数は一五〇五人で、この内の一〇一三人がアルザス・ロー

ヌ出身であった (*Ibid.*, p. 357.)

- (64) 以上 Carole Fink, *Marc Bloch, A Life in History*, Cambridge, 1989, pp. 98-99. (キャロル・フィンク『マルク・ブロック』河原温訳、平凡社、一九九四年、一一七―一一八ページ)。Lucien Febvre, *Combats pour l'histoire*, Paris, 1953, p. 391. (リュシアン・フェーヴル『歴史のための闘い』長谷川輝夫訳、創文社、一九七七年、一〇二ページ)。
- (65) Wahl et Richez, *op. cit.*, p. 277.
- (66) Dreyfus, *op. cit.*, p. 65; Dollinger, *Documents*, pp. 457-459.
- (67) 以上 Wahl et Richez, *op. cit.*, p. 250; Dreyfus, *op. cit.*, pp. 37-38; Dollinger, *Histoire*, p. 470, p. 473.
- (68) Dreyfus, *op. cit.*, p. 107.
- (69) *Ibid.*, p. 43, p. 76.
- (70) Edouard Bonnefous, *Histoire politique de la Troisième République*, t. 4 1924-1929, Paris, 1973, pp. 40-42; Dreyfus, *op. cit.*, pp. 81-85.
- (71) 現在でもアルザスとロレーヌは、非宗教性原則が適応されない地域であり、第三共和政以前の公認宗教制度が維持され、ドイツ民法典に則った非営利社團制度や結社制度を基本とする特例法が存続している(大石真、前掲論文、二二九ページ)。
- (72) 以上 Dreyfus, *op. cit.*, pp. 94, 101-103, 107, 109, 139-141.
- (73) 以下、渡辺和行「ナチ占領下のアルザス」『香川法学』第一四卷第三・四号、一九九五年、一七八―一八一ページ。Dreyfus, *op. cit.*, pp. 117-118, 124, 133-136.
- (74) 以上 Dollinger, *Histoire*, p. 476; Dreyfus, *op. cit.*, pp. 137, 146-151, 186, 193, 201-202, 210; Dollinger, *Documents*, p. 455. 一九二九年の市議会選挙の趨勢は、アルザスの独自性を支持するフランス派が世論の多数派であった。ミュルーズでは、三六議席の内、社会党と急進党が三一議席を押さえた。なお『エルツ』は、Elsass Lothringische Zeitungの頭文字をとったものであり、ナチに好意的な新聞であった。
- (75) Dreyfus, *op. cit.*, p. 249, p. 251, p. 258, p. 261.
- (76) Dollinger, *Histoire*, pp. 477-478.
- (77) 本節については、拙稿「ナチ占領下のアルザス」で論じたので最小限の叙述にとどめた。

- (78) Dreyfus, *op. cit.*, p. 202, p. 203, p. 208, p. 209, p. 216.
- (79) Mayeur, *op. cit.*, p. 77, p. 85.
- (80) 渡辺和行、前掲論文、一五九〜一七六ページ。
- (81) フィリップス、前掲書、一七二ページ。
- (82) Marie-Joseph Bopp, *L'Alsace sous l'occupation allemande 1940-1945*, Le Puy, 1945, pp. 331-358.
- (83) Mayeur, *op. cit.*, p. 85.
- (84) Médard Brogly, *La grande épreuve*, Paris, 1945, pp. 10-11. UPR自治派の上院議員の手になる本書は、フランス人にナチ占領下のアルザスの真実を知らせ、アルザスのフランスへの復帰が戦間期の歴史の再現にならないことを期待して書かれた。プログリーは、フランス語の知識の多寡をアルザス人の心性や愛国心の規準としないように求め、戦前の同化政策に不安を示し、リベラルな政策を期待した (*Ibid.*, p. 145, p. 148)。
- (85) 渡辺和行、前掲論文、一八七〜一八八ページ。
- (86) 渡辺和行『ナチ占領下のフランス』講談社、一九九四年、二三三〜二三四ページ。
- (87) Charles De Gaulle, *Discours et Messages II*, Le Club Français des Bibliophiles, 1971, p. 513; Jean-Marc Théolleyre, *Procès d'après-guerre*, Paris, 1985, p. 173.
- (88) 子安宣邦『近代知のアルケオロジー』岩波書店、一九九六年、三〇ページ。
- (89) 坂井一成「戦後アルザス地域主義の展開と特質」『二橋論叢』第一一四巻、第二号、一九九五年、四五四ページ。
- (90) Dollinger, *Histoire*, p. 487.
- (91) 坂井一成「アルザス・エスノ地域主義とヨーロッパ統合」『国際政治』第一一〇号、一九九五年、七二〜七三ページ。
- (92) Dollinger, *Histoire*, p. 485.
- (93) De Gaulle, *Discours et Messages II*, pp. 71-76.
- (94) Étienne Juillard et Philippe Kessler, Catholiques et protestants dans les campagnes alsaciennes, *Annales, Économies, Sociétés, Civilisations*, t. 7, 1952, p. 51.
- (95) Dollinger, *Documents*, p. 474. フリムランはストラスブールの三つの大志として、アルザスに共通の意思によって鼓舞された生き

た地域的実体を創出すること、欧州共同市場に賭けた国民経済の拡大に先頭で参加すること、歴史によってアルザスに授けられたヨーロッパの使命を達成することを挙げている。

- (96) 相対的剝奪論とは、社会運動が人々の欲求の期待水準と充足水準との格差に起因して生じる不満に由来するという考えである。松本康「相対的剝奪と社会運動」『思想』七三七号、一九八五年、一〇二ページ。

- (97) 以上、宮島喬「コルシカとアルザス」『思想』八六三号、一九九六年、五八～五九ページ。

- (98) 以上、Wahl et Richez, *op. cit.*, p. 239, p. 282. 旧ソ連のタンボフ収容所におけるアルザス兵については、Pierre Rigoulot, *La tragédie malgré-nous*, Paris, 1990.

- (99) Philippe Husser, *Un instituteur alsacien entre France et Allemagne*, Paris, 1989, p. 121, p. 125.

- (100) Charles De Gaulle, *Discours et Messages I*, Le Club Français des Bibliophiles, 1971, p. 537.

- (101) P. Vidal de La Blache, *Tableau de la géographie de la France*, Paris, 1911, p. 228.

付記

本稿は、一九九六年七月二六日に、立命館大学において開催されたドイツ現代史学会第一九回大会のシンポジウム「ドイツとヨーロッパ」における筆者の報告「アルザスとエルザス―フランスとドイツのはざままで―」に加筆したものである。報告の機会を与えていただいたドイツ現代史学会と、当日のコメンテーターのご指摘やフロアからのご意見に謝意を表明しておきたい。